

「だるまさんがころんだ」や「にらめっこ」、「起き上がりこぼし小法師」や「だるま落とし」・・・。縁起物の張り子の「だるま」など、身近にある、達磨さま。

仏教をよく知らないという方でも、達磨さまのことをご存じない方は少ないのではないのでしょうか。

正式なお名前は菩提達磨大和尚。お釈迦さまから数えて二十八代目、インドから中国へと仏教を伝えた、禅宗の開祖でもある方です。

十月五日は達磨さまの御命日と伝えられており、禅宗の流れを汲み、坐禅を修行の中心に据える曹洞宗では、毎年達磨さまを偲ぶ法要をお勤めいたします。

達磨さまその人については、現存する資料が少なくその御生涯は謎が多いのですが、いくつもの伝説が伝えられています。

インドから仏教を伝えるために中国に渡った達磨さまは、当時りょう梁という国を治め、仏教信仰が篤かった武帝ぶていに招かれ問答を交わします。この問答では達磨さまの真意が武帝に伝わらず、達磨さまは未だ機が熟していないと感じたのか、その後、武帝ぶていの元を去り、嵩山すうざんの少林寺しょうりんじにて九年間の坐禅をされたと伝えられています。

坐禅は、手を組み足を組んで姿勢を正して身体をととの調え、さらに呼吸をととの調えて、自らの心と向き合います。自己を見つめて自我欲望のとらわれから離れ、ただひたすらの坐禅となります。張り子の「だるま」は、この坐禅の姿を表しています。

身体をととの調え息をととの調えて、心がととの調った状態であるとき、目の前のものに惑わされず、右往左往もしない。倒れそうになったとしても自己を取り戻して元に戻ることができる、「起き上がりこぼし小法師」のような自分であることに気がつくでしょう。

また、坐禅で自己を見つめ直した心は、いかに足もとが揺らいだとしても、自らの在り方や生き方をしっかりと見出すことができるでしょう。そのような揺るぎない自己を、倒れることなく立ち続ける「だるま落とし」の「だるまさん」はあらわしているのかも知れません。

今となっては少し古く感じる遊びやおもちゃですが、このように見直すと、遊びながらも知らず知らずのうちに達磨さまが伝えられた坐禅の一端いったんに触れることができる、先人の知恵が詰まったものを感じられてくるのです。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

十月五日の御命日に際し、達磨さまを偲び、達磨さまが伝えられた坐禅に親しまれてはいかがでしょうか。

— 終 —